

令和七年度 入学試験問題 第二日

現代の国語・言語文化

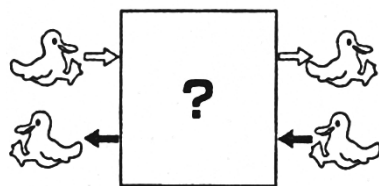
第1問 次の文章を読んで、後の問（問一～問八）に答えよ。

ことばは、子どもをどのように変えるのだろうか。ことばを覚えることで、コミュニケーションが可能になる。しかし、子どもが得るのは、コミュニケーション能力だけではない。

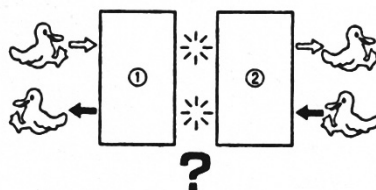
私たちは、自分の家にいるペットのネコが他のネコと違うことは、もちろんわかっている。今あなたの三毛ネコ「ミケ」があなたのひざにのっていたら、庭に見える、家のネコと見分けがつかないほどそっくりなネコが、家のミケではありえないと考える。それは^ア同じ瞬間において、別の空間に同じ個体が同時に存在し得ないことを知っているからだ。

今度はあなたの目の前からミケがいなくなり、ミケが見えなくなったほうから黒いネコが現れたとしよう。あなたは黒いネコがミケだと思うだろうか。そうは思わないはずである。ミケとその現れた黒いネコは、明らかに見た目が違うからだ。つまり、私たちは「同じ個体」であるという認識に、時空間上の制約と見た目を両方使っているのだ。

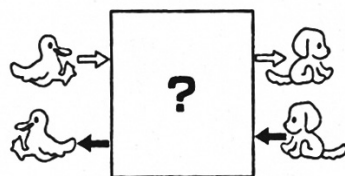
赤ちゃんはどうだろう。生後十か月の赤ちゃんは、ことばを覚え始めたばかりで、まだほんのわずかなことばしか知らない。この赤ちゃんに、ある研究者は、このような実験をした（実験1）。その赤ちゃんに人形劇の芝居のような舞台を見せる。舞台の上には、ついたてが一枚置いてある。この舞台で赤ちゃんは、おもちゃのアヒルがついたての後ろで動いているらしいシーンを見る。（実験者がアヒルを手で動かしているのだ。）アヒルはついたての左端からついたての後ろに入り、見た目はまったく同じアヒルが右端から出てくる。また同じアヒルが今度は右端からついたての後ろに入り、左端から出てくる。赤ちゃんは、おもちゃのアヒルが何個あると思っているだろうか。



実験1 1枚のついたてとアヒルのおもちゃの出入り



実験2 2枚のついたてとアヒルのおもちゃの出入り



実験3 1枚のついたてとアヒル、イヌのおもちゃの出入り

この場合、ついたての後ろで何が起こっているのか見えないので、二通りの答えが可能である。アヒルは二個かもしれないし、一個かもしれない。しかし、別の研究から、赤ちゃんは連続した軌跡で動くものは一つのモノであると考え、ということがわかつているので、この場合は、アヒルは一個だと思うはずだ。

今度は実験2のように、同じ舞台の上に、ついたてを二枚置く。ついたての間には隙間があつて、間にあるものが見える。左側のついたてをついたて①、右側のをついたて②としよう。さつきと同じように、アヒルはあるときは、ついたて①の左端からついたての後ろに入り、見えなくなる。次に、見た目にはまったく同じ、アヒルが、ついたて②の右端から姿を現す。しかし、ついたての間の隙間からアヒルは見えなかった。今度はアヒルは、ついたて②の右端から入る。先ほどと同様に二枚のついたての間には姿を見せず、ついたて①の左端から出てくる。このとき、赤ちゃんは、おもちゃのアヒルがはたして何個だと思うだろうか。

この場合、アヒルは二個でなければならぬはずだ。もし、ついたて②の右端から現れたアヒルが、ついたて①に入つていったアヒルと同一のおもちゃ（まったく同じ個体）だとしたら、ついたて②の右端から姿を現す前に、ついたて①と

ついたら②の隙間の空間に、それが見えなければならぬはずだからである。それが見えなかった、ということは、見た目が同じアヒルのおもちゃが二個あつて別々に動いていたはずだ。

驚くべきことに、生後十か月の赤ちゃんに、この推論ができるのである。赤ちゃんは、ついたら一枚だった場面であつたが取り払われ、アヒルのおもちゃが一個だけだとわかつて驚きを示さなかったが、ついたら二枚ある場面であつたが取り払われ、一個のアヒルしかなかったときは、びっくりして舞台をじつと長く見つめ続けたのである。

この結果は、赤ちゃんが、モノが動いているときに、動きの時間的連続性と空間的連続性を手がかりに、いくつのモノが動いているかを理解できることを示している。言い方を変えようと、赤ちゃんは動きの時間・空間上の軌跡が連続しているかそうでないかによって、動いていたものが同じ個体か違う個体か、ということを決めることができるのだ。【段落Ⅰ】

さて、この研究者は次にどのような実験を行ったか。前の実験では、まったく見た目が同じアヒルが、ついたらの後ろを出たり入ったりしていた。今度は、二つのモノが登場する。最初の場面と同じように、ついたら一枚で、その左端からアヒルのおもちゃがついたらの後ろに入り、次に右端からイヌのおもちゃが出てくる（実験3）。今度はイヌが右端からついたらの後ろに入り、左端からアヒルが出てくる。【段落Ⅱ】

この場合、大人の私たちは当然、アヒルとイヌという二つのおもちゃが別々に動いているかと思ひ、二つのおもちゃがあるのが当然、と考える。だが十か月の赤ちゃんは、そうは考えないようだ。前の実験で、ついたら二枚になつて、ついたらの間からモノが行ったり来たりしているのが見えなかったときには、赤ちゃんは、おもちゃが二個なければならぬはず、と考えることができた。しかし今度は、アヒルとイヌというあきらかに違うモノが動いていたのにもかかわらず、ついたら一枚しかないと、それが取り払われたときに、そこにあるのがアヒルとイヌの二個のおもちゃではなく、どちらか一個しかなくてもびっくりしなかった。【段落Ⅲ】

これは何を意味しているのだろうか。ことばを学習する前の赤ちゃんは、時空間上の動きが連続しているか否かによつてのみ、モノが同一の個体か、そうでないかを決めていて、モノ自体の見かけが同じかどうかは考慮しない。十か月の赤

ちゃんが、視覚的にアヒルとイヌのおもちゃを見分けられないことはありえない。しかし、一つの時間点に一つしか現れない、動いているモノが「同じ個体」なのか「別の個体が二つ」なのかを決めるのに、赤ちゃんは、見た目の違いよりも、動きの連続性のほうが大事だと考えて、イヌとアヒルの見た目の違いに注意を向けず、「一個」と考えてしまうようだ。それが、「イヌ」とか「アヒル」ということばを知ると、二つのおもちゃが「違うモノ」であるとはつきり認識するようになるのである。

実は、まだ「アヒル」、「イヌ」ということばを知らない赤ちゃんに、「見て、アヒルだよ」「見て、イヌだよ」と言いながら、さっきのように、一枚のついたての後ろからイヌとアヒルが出たり入ったりする実験をすると、「アヒル」「イヌ」ということば自体を知らなくても、二つのことばが言われたという事実から、モノが二つあることを期待することもわかった。【段落Ⅳ】

先ほどの三毛ネコと黒ネコの話に戻るが、二匹を同時に見なくても、私たちは見た目の違いから、それが二つの別の個体であることがわかる。しかし同時に私たちは、その二匹のネコがともにネコだから「同じ」であるとも思う。ここに、見た目はネコに似ている小型のイヌ（例えばチワワ）が登場したとしよう。そのとき、私たちは黒ネコが三毛ネコと「同じ」であるのと同じように、そのチワワも先ほどの三毛ネコと「同じ」であるとは考えない。チワワはイヌだから「違う種類の生き物」だと考える。そして、三毛ネコと黒ネコは同じような生物学的特性や行動特性を持つが、チワワは違う特性を持つ、と考える。

A、私たちは「同じ名前がつく同じ種類のモノ同士」を「同じ」であると考ええる。**B**、同時に、ネコ二匹もチワワも、ともに哺乳動物なので、何らかの同じ特性を共有しているはずだとも考えるのである。

幼児も私たちと同じように考えるだろうか。例えば、三歳から五歳くらいの子どもにウシの絵を見せるとしよう。続いて、ブタの絵とミルクの絵を見せる。**C**、子どもに「これ（ウシ）と同じ種類なのはどっち？」と聞く。**D**、子どもは多くの場合、ミルクの絵が「同じ種類」だと言う。ウサギの絵を見せて、同じなのはどっち、と聞き、ニンジン

とネコの絵を見せる場合にも、ニンジンを選ぶ子のほうが多い。子どもはもともウシとミルク、ウサギとニンジン、サルとバナナ、というような連想関係にあるモノ同士を仲間と考え、「同じ」であると言う傾向が強い。

しかし、例えば、「^ウ怪獣語ではウシのことをネケと言うんだよ」と子どもに教え、ブタとミルクの絵を見せて、「どっちがネケ？」と尋ねるとする。すると、「同じ種類のモノ」を選んで、と言われたときはミルクを選んでいたのに、同じ年齢の子どもが、今度はブタを選ぶのだ。

子どもにとって、ウシとミルク、サルとバナナのような連想関係はとても魅力的である。だから、単に「同じのはどっち？」と聞かれると、連想関係にあるモノを選ぶ。しかし、ラベルに関しては、ウシとブタのような、同じカテゴリーに属するモノが同じラベルを共有する、と考え、サルとバナナのような連想関係にあるモノ同士は、同じラベルを共有しないはずだ、と考えているのである。

私たちは世界を様々にくくり、分類していくことができる。食べ物、道具、食器、植物、動物などのように概念を階層的に整理して分類することもできるが、「赤いもの」、「固いもの」、「丸い形をしたもの」のように、ある特徴によって分類することもできる。あるいはウシとミルクのように因果関係、サルとバナナのように連想関係で、モノ同士をまとめていくことも可能だ。

このように、いろいろな基準でいろいろな分類が可能な中で、大人は「同じ種類」と言われると、ウシとブタのような同じ概念カテゴリーに基づくモノ同士が「同じ種類」だと考える。それに対して、子どもは、モノ同士の関係のあり方として、因果関係、連想関係、同じ属性を持つ関係、同じ材質からできている関係など、様々な基準での「同じ」が存在することに早くから気づいているのだが、どの「同じ」をいつ使うべきなのかわからないのだ。しかし、ことばの存在により、ことば（名詞）によってラベルづけされる分類の仕方、つまり概念カテゴリーに従った分類が特別な分類だ、ということ学習していくのである。

（^{いま}今井むつみ著『ことばと思考』に基づく）

問一 傍線部ア「同じ瞬間において、別の空間に同じ個体が同時に存在し得ない」という認識と最も関連のあるものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

- ① 時空間上の制約
- ② 時間的連続性と空間的連続性
- ③ 個体の時空間上の軌跡
- ④ 動きの連続性の推論

問二 ことを覚え始めたばかりのころの赤ちゃんを対象にした三つの実験（実験1・実験2・実験3）から、同一の個体かどうかの識別に関してどのような特徴がわかったか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、イ。

- ① 赤ちゃんは、時空間上の動きの連続性で見かけの両方を手がかりにしている。
- ② 赤ちゃんは、見た目の違いよりも、動きの時間・空間上の軌跡の連続性を優先してしまう。
- ③ 赤ちゃんは、ついたてが二枚になると、あきらかに違うモノが動いているにもかかわらず識別できない。
- ④ 赤ちゃんは、隙間の空間にモノが見えたときのみ、ついたての後ろのモノの同一性を推論できる。

問三 次の文は、どの段落の後に挿入するのが最も適切か。次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

つまり、モノの見た目よりこともば同じか違うかを頼りに、赤ちゃんは、時空間上に同時には存在しないモノが、同一のモノなのか、それとも二つの違うモノなのかを決めているようなのである。

- ① 【段落Ⅰ】 ② 【段落Ⅱ】 ③ 【段落Ⅲ】 ④ 【段落Ⅳ】

問四 空欄A、Dに入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、エ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|-----|---|------|
| ① | A | なぜなら | B | すると | C | さらに | D | とはいえ |
| ② | A | ところで | B | だから | C | また | D | すなわち |
| ③ | A | ところが | B | ただし | C | そこで | D | もつとも |
| ④ | A | つまり | B | しかし | C | そして | D | すると |

問五 傍線部イ「幼児も私たちと同じように考えるだろうか」とあるが、この後の実験では、被験者が「赤ちゃん」ではなく、「幼児」であるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、オ。

- ① 子どもが、「同じ名前がつくモノ同士」を「同じ」であるというように、共有される同じ特性から対象を捉えることができるか否かを明らかにするため。
- ② 子どもがモノ同士の関係を理解する際に、ことばの存在がどのように影響するかを調べるためには、被験者がある程度ことばを学習している必要があるため。

- ③ 子どもは、「同じ種類」を選ぶ際に連想関係にあるモノ同士を仲間と考え、「同じ」であると言う傾向が強いことを説明するため。

- ④ 子どもは、モノ同士の関係について、因果関係や連想関係など様々な基準での「同じ」が存在することに早くから気づいていることを説明するため。

問六 傍線部ウ「怪獣語ではウシのことをネケと言うんだよ」とあるが、この実験で「ネケ」ということばは、子どもに何を意識させるために用いられているか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、カ。

- ① 特徴による分類
- ② 連想関係による分類
- ③ 概念カテゴリーによる分類
- ④ 因果関係による分類

問七 本文の論の展開や叙述の特徴として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、キ。

- ① 大人の場合と乳幼児の場合とを比較しながら説明している。
- ② 赤ちゃんの認識の仕方の特徴を、比喩を用いてわかりやすく説明している。
- ③ 具体例を避けて抽象的な概念を関係づけながら説明している。
- ④ 幼児の認識の特殊な事例を挙げ、最後に一般化するという順序で説明している。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ク。

- ① 子どもは、時空間の連続性や連想関係など、様々な基準で事物を「同じもの」として認識している。しかし、ことを学習するにつれて、概念カテゴリーに基づく分類能力が向上し、モノをより抽象的に分類できるようになる。
- ② 子どもは、見た目の類似性に基づいてモノを分類することが多い。しかし、ことばを学習するにつれて、属性や材質に基づいたより複雑な分類能力が育まれる。
- ③ 子どもは、異なる概念カテゴリーに属するものを、見た目の類似性に基づいて同じ種類として認識することがほとんどない。しかし、ことばの存在によって、因果関係や連想関係を考慮する能力が向上していく。
- ④ 子どもは、見た目の類似性よりも因果関係や連想関係に基づいてモノを分類する。これにより、概念カテゴリーに従った分類が正確にできるようになる。

第2問

次の文章の筆者は、アート作品の制作において、創造性は「外部」との接触によって生まれると主張し、外部との接触とはどのようなものかについて次のように説明している。この文章を読んで、後の問（問一～問八）に答えよ。

（注¹） 私はしばしば、^ア窺い知れない外部とか、知覚不可能だが存在する外部、という言い方をするが、そうすると、

「そういう、解決不可能なものの特権化するのがダメで、内と外をつないだ世界観を構想することこそ大事なのだ。」などとお叱りを受ける。しかし、（注²）「わたし」の知っている内（こちら側）とつながれるように想定された外（向こう側）とは、内から勝手に規定された外に過ぎないだろう。そのようにつながられた内と外によって構成される全体こそ、「わたし」が想定する、閉塞的な世界なのである。私は常にそのように反論するのだが、わかってくれる人はそう多くない。

まだ行ったことはないが、存在するらしい向こう側とか、「わたし」はあなたではないが、同じ人間として理解可能なあなたとか。このような向こう側やあなたは、こちら側にいるままにして、「可能なもの」と想定されている。現に知覚できたり現れていなかったりしても、知覚できるとしたらこのようなものであらうと、そのありさまを想定できる。このような、いまだ現れないが可能なもののいる場所を、ここでは外側と言うことにする。すでに現れ、知覚しているもので満たされた場所が内側であるが、外側は、この内側と対を成すものと定義される。内側と外側から構成される全体は、しよせん「わたし」が想定する世界である。

これに対して、外部とは、この内側と外側の成す全体からは窺い知れない、その全体の外に位置づけられるものである。ここでは、この、外側と外部とを厳密に区別していく。「内と外をつなげることこそ重要な問題である」という場合の外は、外側のことであって、外部ではない。外部は可能なものとして想定できない。

では、外部に触れる体験とは、どのような体験だろうか。創造という行為、とりわけ芸術家の営みは、これに当たると言っていいたいだろう。創造行為がいかにして外部を感じることなのか、説明しようと思う。

（注³） 認知科学者の（注⁴） マーガレット・ボードンは、人工知能（AI）に創造性をもたせられるか否かを検討するため、

創造とは何かについて論考している。そこで創造は、第一に組み合わせ的創造、第二に探索的創造、第三に質的变化を伴う創造に分類される。第一の、組み合わせ的創造とは、よく見知ったものを、しかし組み合わせとしては、誰もが想定しなかった組み合わせで実現する創造である。今では知られているものの、最初にその組み合わせを試したときには、誰も思い浮かばなかった組み合わせというものがある。例えば、デザートとしてのアイスクリームはよく知られており、熟成されて粘度を増したバルサミコ酢も、サラダや肉料理などに使われてきた。しかし、アイスクリームにバルサミコ酢をかけてみたら、意外なことにすごく美味^{おい}しい。これなどが、組み合わせ的創造である。

第二の、探索的創造というのは、何かを創造するための探索空間はあらかじめ用意されているものの、空間が無限に広がっているかのように広く、探索の結果、思いもよらないものが見つかるというような創造である。将棋や囲碁で、新しい手を見つける創造がこれに当たるだろう。人間は可能な手の空間すべてを探索するわけではなく、棋士にとって常識的でよく探索された空間ばかりを探索する。そこから遠く離れた手は、思いもよらないものとなる。そのような手が探索的創造と言われるわけだ。

第三の、質的变化を伴う創造というのは、概念空間を規定する規則が変化してしまうような創造である。

A

、持ち手のついたカップで、いつも水を飲んでた子どもを想像してみよう。その子は、自分の持っている赤い持ち手のついたマグカップで、いつも水を飲んでたが、持ち手が重要な要素だと信じていて、カップとは「持ち手のついたもの」だと、無自覚に定義していた。こうして得られるさまざまなカップを網羅する空間が概念空間である。そのうち目にするカップの種類も増え、その子の赤いカップとは異なり、白いマグカップや、薄手の紅茶用磁器も、カップなのだと思うようになった。

B

 相変わらず、カップの定義は「持ち手のついたもの」なので、どれも持ち手はついていた。

そこで改めて、その子は、カップの性格について考えてみた。すると、「中央に大きな窪^{くぼ}みがある」性格をどれももつことがわかった。

C

、今度は、「中央に大きな窪みがある」をカップの一つの性格ではなく、カップの定義にしてみた。カップの概念空間は、質的に変わる。以前の定義ではカップに入らなかった、持ち手のない容器さえ、今やカップと

呼ばれることになるのだから。

イ ボーデンは、こうした論考を展開した著書の最初のほうで、組み合わせ的創造や探索的創造は、真の創造とは呼べず、質的変化を伴う創造だけが真の創造だと述べる。後者のみが、概念空間の定義を変えてしまうからだ。しかし翻って、質的变化を伴う創造とは、いかにして可能なだろう。それを実現するには、何らかの「価値」が必要だ、とボーデンは言う。実際、先に述べたカップの概念空間の場合にも、カップの性格を取り上げるとき、可能な性格の中から、「中央に大きな窪みがある」という性格を選んだのである。「重い」とか、「ツルツルした手触り」とかを選んでよかったのだが、「中央に大きな窪みがある」を選んだ。それは、カップに対するそのときの何らかの価値において、選択したと言えることになる。

価値というものは曖昧で、あらかじめ規定できるものではない。そのとき、そのときの周囲の状況、本人の気分などによって微妙に変化するものだろう。価値がどんな条件に依存して変化するかも厳密に決められない。その結果、概念空間の質的变化が起こるのであるから、この価値依存性は、創造にとって最も本質的であることがわかる。ここでボーデンは考える。組み合わせ的創造や探索的創造は、真の創造とは呼べないと言ったが、それでも創造の核となるのは、「価値」なのではないか、と。組み合わせ的創造では、常識的に使われる組み合わせの範囲が想定され、探索的創造では、やはり常識的に使われる概念空間の領域が想定され、その「外側」で創造が実現される。しかし、そのような常識的範囲や常識的領域を決めるのは何なのか。そのとき、その場所での、文化状況や時代背景にも依存した「価値」ではないのか。だとすると、^エ組み合わせ的創造や探索的創造もまた、真の創造だと言っているだろう。ボーデンはそう述べる。

ボーデンの議論を引き取り、外側と外部の区別の観点から、もう少し議論を展開してみよう。もともと、言葉の組み合わせは有限で、その組み合わせはあらかじめ原理的に決まっているはずだが、詩人は世間の価値観では思いもよらない組み合わせを創造する。私のウェブサイトには、「特別に訓練されたカブトムシ」という言葉を掲げ、その卑近な例を示している。「特別に」「訓練された」「カブトムシ」の各々はよく使われる言葉で目新しさはない。

D

、この三つの言葉

が並べられることで、秘密結社か何かで、とんでもない行動を訓練されている、まがまが禍々しいカブトムシがイメージされる。逆に、「特別に誂あつらえた服」「訓練された軍隊」や「樹液を吸うカブトムシ」のような言葉の組み合わせは、常識的でおもしろみもない。常識的な範囲を決める「価値」が、明らかに、その背後にあるわけだ。

価値は、時代や文化的背景によっていかようにも変化するだろう。そんなに遠くない未来、遺伝子編集によって学習能力や筋肉を格段に増強されたカブトムシが現れ、そのようなカブトムシを特別に訓練することが常識になるかもしれない。そのときは、まったく同じ言葉、オ「特別に訓練されたカブトムシ」に、何の驚きも、禍々しさも感じないだろう。つまりまったく同じ組み合わせであっても、それが常識的か否かの判断は異なることが可能であり、それは価値による、ということになる。そして、その価値を明確に定義しようと思っても、社会や文化、その歴史までもが関わり、どこまでその価値に影響を与えているのか決められないことになる。価値は、有限の言葉で確定できず、コントロールすることができない。

価値によって決められる「外側」、それは外側なのだろうか。言葉の数は有限で、その組み合わせも原理的に有限だ。意味を考えない言葉の組み合わせは、よく使われる内側とそれ以外の外側に分けられ、内側と外側で完結している。しかし、そこに価値が関わってくると、見かけ上の言葉の組み合わせで数は尽くせない。「特別に訓練されたカブトムシ」ですら、現在と、想像される未来とで、その意味に関して二つの可能性、「禍々しいもの」と「常識的なもの」が現れたわけだ。つまり、常識的に使われる言葉があり、その外側の言葉の組み合わせがたった一つしかない場合でさえ、価値に依存してその意味はいくらでも可能であり、原理的には、無限に存在することになる。

現代を生きる「わたし」の価値で想定される内側と、その内側から想定される外側は、有限に限定され、内側と外側で「言葉の組み合わせ空間」を規定しているように思えるが、価値に依存した意味的な組み合わせは、その「言葉の組み合わせ空間」の外部に、無限に広がっていることが理解できる。かくして、創造は、外部との接触において実現する。もちろんそれは、探索的創造においても、さらには質的変化を伴う創造でも同じことだ。つまり、これら三つの創造のすべ

てが、外側ではなく、外部との接触において実現され、意味における変化、すなわち質的变化をそのどれもが伴うのである。

創造が外部に触れることであるなら、それは決して有限の形式で捉えられない無際限さを含むことになる。「わたし」が決定する価値は、無際限さに開かれ、自分でさえ確定的に記述できないものの、わたしにおいては自明である。かくして、わたしが感じる創造とは原理的には「わたし」だけのもの、当事者のものとなる。創造とは何かという問いは、客観的に創造を定義しようという問いであったが、問い自体がむしろ解体され、Xという性質が現れたことになる。

(郡司^{ぐんじ}ペギオ幸夫^{ゆきお}著『創造性はどこからやってくるか——天然表現の世界』に基づく。
ただし、出題に際し省略などの改変をしている。)

(注) 1 私……ここでは筆者自身(理論生命科学者の郡司ペギオ幸夫)を指す。

2 「わたし」……ここでは誰にでも当てはまる知覚主体のこと。

3 認知科学……人間の認知活動を説明しようとする学術的な科学。

4 マーガレット・ボードン……一九三六―イギリスの認知科学者。

問一 傍線部ア「窺い知れない外部とか、知覚不可能だが存在する外部」とあるが、それはどういうものであると筆者は考

えているのか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

- ① まだ行ったことはないし、知覚もできないが、存在するらしい向こう側にある。
- ② 知覚できずに、ありさまを想定することしかできない場所に閉ざされている。
- ③ 知覚されているもので満たされる内側と対をなす外に存在している。
- ④ 「わたし」が知覚して想定する世界ではなく、ありさまを想定することさえできない位置にある。

問二 空欄A Dに入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、イ。

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|-----|---|-----|---|---------|
| ① | A とりわけ | B | ただし | C | つまり | D | そこから |
| ② | A すなわち | B | そして | C | すると | D | たしかに |
| ③ | A 例えば | B | しかし | C | そこで | D | にもかかわらず |
| ④ | A そこで | B | さらに | C | 一方で | D | とりあえず |

問三 傍線部イ「ボーデンは、こうした論考を展開した著書の最初のほうで、組み合わせ的創造や探索的創造は、真の創造

とは呼べず、質的变化を伴う創造だけが真の創造だと述べる」とあるが、そのようにボーデンが述べた理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

- ① 組み合わせ的創造も探索的創造も、外部との接触は偶発性に委ねられており、あらかじめ規定できないから。
- ② 組み合わせ的創造も探索的創造も、組み合わせや探索の方法によつては外側に出ることさえできないから。
- ③ 組み合わせ的創造も探索的創造も、詩人やプロ棋士のような専門家でないとその外側に出ることができないから。
- ④ 組み合わせ的創造も探索的創造も、既存の概念自体は変えずに行われる創造であるから。

問四 傍線部ウ「価値」のもつ特徴として不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、エ。

- ① 概念空間と同時に変化する。
- ② 時代や文化によって変化する。
- ③ 常識の範囲を決める。
- ④ あらかじめ規定できない。

問五 傍線部エ「組み合わせ的創造や探索的創造もまた、真の創造だと言っているだろう」とあるが、そのように言うこと

ができる理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、オ。

- ① 組み合わせ的創造や探索的創造も、あらかじめ普遍的な価値によって想定された領域で起こるから。
- ② 組み合わせ的創造や探索的創造も、想定する常識的な範囲や領域はその時々々の価値に依存していないから。
- ③ 組み合わせ的創造や探索的創造も、一定の間隔で価値が微妙に変化することで引き起こされているから。
- ④ 組み合わせ的創造や探索的創造も、何らかの価値を規定すれば概念空間の定義を変えることが可能であるから。

問六 傍線部オ「『特別に訓練されたカブトムシ』に、何の驚きも、禍々しさも感じないだろう」とあるが、そのように述

べることができる理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、カ。

- ① 時を積み重ねることによって、最初は禍々しいと感じた言葉にも次第に自然と慣れていくから。
- ② 遺伝子編集技術の発展によって、生き物のありさまは徐々に変化していくものだから。
- ③ 時代や文化とともに変化する価値によっては、現在と常識が変わるかもしれないから。
- ④ 普通の意味をもつ言葉の組み合わせに過ぎないことに気づけばもはや驚くことはないから。

問七 空欄 X に入る言葉として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、キ。

- ① 無際限さ ② 当事者性 ③ 客観性 ④ 禍々しさ

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ク。

- ① ボーデンが挙げる三つの創造は、どのような価値に依存するかによって外部に無限に広がり、外部と接触することによって創造性をもつ。
- ② 価値に依存することが創造の本質であり、「わたし」が想定する世界もその価値によって変化することから、外部に触れることが可能になる。
- ③ 内側と外側で構成される世界を作り出すのは価値であり、それは創造主体だけが確定できるため、自分勝手なものに過ぎない。
- ④ ボーデンによる三つの創造は価値に依存しており、その価値は「わたし」によってあらかじめ規定されるため、客観的に観察することが可能である。

第3問 次の各問（問一～問八）について、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各群において、傍線部の漢字が適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ア・B イ・C ウ・D エ。

- A
- ① 群衆が一勢に立ち上がった。
 - ② 処世術を身につける。
 - ③ 風邪をひいて悪感がある。
 - ④ 新しい方法が侵透した。

- B
- ① なんだか気嫌が悪い。
 - ② 疑証の罪に問われた。
 - ③ 壞古的な雰囲気が漂う。
 - ④ 彼の人柄は保証できる。

- C
- ① 小学生時代を顧みる。
 - ② 時間を裂いて会いに行く。
 - ③ 緊張して試験に望む。
 - ④ 彼に立候補を進めた。

- D
- ① ボールは孤を描いて落ちた。
 - ② 予算の枠内で式を準備した。
 - ③ 惨めな負け方をする。
 - ④ 指にとげを指す。

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が不適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A オ ・ B カ ・ C キ ・ D ク 。

A			
④	③	②	①
醸造	更迭	秘匿	曇天
(チュウゾウ)	(コウテツ)	(ヒトク)	(ドンテン)

C			
④	③	②	①
覆	悼	賄	憤
(クツガエ)	(イタ)	(マカナ)	(イカ)
す	む	う	る

B			
④	③	②	①
操縦	真綿	奔走	篤志
(ソウジュウ)	(マワタ)	(ハンソウ)	(トクシ)

D			
④	③	②	①
湖沼	遂行	示唆	頒布
(コショウ)	(ツイコウ)	(シサ)	(ハンブ)

問三 次のA群とB群において、傍線部の漢字の読み方が同じ組み合わせはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ケ ・ B コ 。

A			
④	③	②	①
納涼	至極	吐露	外科
納豆	極意	披露	外注

B			
④	③	②	①
囑望	行進	煩惱	証拠
熱望	行脚	煩雑	準拠

問四 次のA群とB群において、対照的な意味を表す語の組み合わせとして不適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A サ・B シ。

A			
④	③	②	①
能動	高価	愚鈍	債権
受動	廉価	愚直	債務

B			
④	③	②	①
放任	個性	過分	熟練
干渉	集団	応分	未熟

問五 次の①～⑧の中で、傍線部の仮名遣いが不適切なものを二つ選べ。順序は問わない。解答欄は、ス・セ。

- ① 交渉が行きづまった。
- ② 風船がちぢむ。
- ③ うなずきながら話を聞く。
- ④ 説明書のとうりに操作する。
- ⑤ 部屋の中をかたずける。
- ⑥ 経過のおおよそを説明する。
- ⑦ おうとつのある道路を修復する。
- ⑧ 雨で工事がとどこおる。

問六 次のA・Bの語句の使い方として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A

B
タ。

A
場当たり

- ① 会場は場当たりの感動に包まれた。
- ② 場当たりの失敗が成功に結びついた。
- ③ 場当たり的な指示にはついていけない。
- ④ 腹を立てて場当たり次第に物を投げつけた。

B
引けを取る

- ① 押されたら、相手の力を利用して引けを取ることが大切だ。
- ② 延長戦の末、ついに引けを取ることができ、優勝した。
- ③ 強引に進めるだけでなく、時には引けを取ることも必要だ。
- ④ 悔しいが、野球の実力に関しては彼に引けを取る。

問七 次のA～Cの各文を完成させるのに最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A

B ツ・C テ。

A 日本の企業では、会議は

- ① 切々と
② 往々にして
③ あたりかまわず
④ そらぞらしく

長くなりがちだ。

B 私は社長として、

- ① むげに
② おのずと
③ 必ずしも
④ あくまでも

現行の経営方針を貫くつもりだ。

C わずかな金額なので、

- ① よそよそしくて
② そっけなくて
③ 気が引けて
④ 差し出がましくて

お金を返せと言いつけない。

問八 次のA群とB群において、傍線部の言葉の使い方が不適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ト・B ナ。

A

- ① 試験日まであと一週間だけなので、焦っている。
② 彼女は三年もフランスにいただけあつて、流暢^{りゅうちやう}なフランス語を話す。
③ 母はただ笑うだけで、私の話をまじめに聞いてくれなかった。
④ あきらめていただけに、不合格の知らせに意気消沈した。

B

- ① 忠告をしたばかりに、彼を戸惑わせてしまった。
② 荷物をトラックに積み終えたので、あとは出発するばかりだ。
③ いびきばかりに寝言まで聞こえる。
④ 泣かんばかりに頼むので、しかたなくお金を貸した。

〔国語の問題は以上です〕